



安らかな寝顔だった。

あの夜からもう三日が過ぎていた。

ベットの脇に腰掛けた紗季子は、目を醒まさぬ娘の髪を指で撫でてみた。

艶やかな黒髪が指先をくすぐった。

よく判りもしない原因で死にかかっていたというのに、何をもって助かったと言えるのか

峠を越えたようだと言った医師の言葉も、彼女の不安を拭ってはくれなかった。

あの時、加夏子の隣に座り、一心不乱に祈りを捧げる司祭のように全身を汗まみれにして、あげく大量の血を吐いて別の病室に運ばれていった少年がいた。

彼が何をしたのか、憲一の説明を聞いたところで紗季子にはよく判らなかつた。

判らなかつたが。

あの夜、彼が加夏子を瀕死の状態から救ってくれたという事を、紗季子は疑っていなかつた。

お願い、目を開けて

カナ…

◇

髪を撫で続ける紗季子の後ろでドアの開く音がした。

「お嬢さんの様子はいかがですか、清水さん」

看護師が一人、検査セットを手に紗季子の脇へ来た。

恵美子だった。

「御主人が戻られたら一度、御休みになられた方がいいのでは？ もうずっと付き添っていらっしゃいますし。軀がもちませんよ」

「ありがとう、衣笠さん。私は大丈夫」

そう答えた紗季子の目の下には、ファンデーションでは隠し切れない程ハッキリと隈が出ていた。

疲れ切っている…

しっかりと背を張ってはいるが、いつ疲労と心労で倒れてもおかしくないと思美子は思った。

空きのベットがひとつ必要になりそう

点滴のブドウ糖が1パッケージ、いえもう一つ…

私情に流されない自分が恵美子は時々嫌になる。

看護師としては有用な資質なのだろう

でもこんな時、励ましてあげるような言葉の一つも掛けてあげたっていいのではないか

だが彼女は、それをしなかった。

「無理は禁物ですからね」

殊更に事務的な口調で言い、恵美子は手を伸ばして体温計を差し込もうとした。

その腕が思いもかけず強い力で握られた。

「えっ?!」

「今、動いた…動いたんです!」

興奮して恵美子の手を握り締める紗季子の後ろで、ゆっくりと加夏子が目を開けた。

…アイツ、ヤツツケテヤッタ…

しわがれた声が虚ろに響いた。

◇

ゆったりと広い部屋。

総木目張の内装にマホガニーの机と豪華なソファが一組。

相応の金がかかっているのが一目で判る作りだった。

机の向こうから、病院長がまだ若い医師に向かい尋ねた。

「足のほうはマダ駄目なのかね？」

「ええ、言語機能には全く障害は残っていません、テストでの受け答えもしっかりしています。脚部の痛覚検査も低数値ですが反応を見せていますし、医学的な見地からは健康体と言っても差し支え無いと思われます。しかし…」

「動かん、か」

フゥ〜と大きく溜め息をついた病院長はシガーボックスに手を伸ばし、葉巻を一本取り出すと吸い口を切りながら言った。

「あの娘の入院も一年を越えた。一定の治療成果を出せたのは喜ばしい事だが、そろそろ次の段階について考えた方が良いのではないかね」

「次の…段階、とは？」

言葉の意図をはかりかねた医師が困惑気味に聞き返した。

葉巻特有のトロリとした煙を吐き、茫々とした目で病院長が医師を見る。

「外科療法から心理療法に重点を移すという事だよ。精神科の九十九君は確か君の同期だったな。今後は彼をあの娘の担当にしようと思う。ご苦労だったな」

「待って下さい！」

医師が慌てて病院長の言葉を遮る。

「覚醒後の様子が以前と異なります。妙に感情の起伏が激しくなったと言うか、攻撃的になったと言うか」

「だから精神的なケアが必要だと言ってるのだ。君は一体、何を聞いていたんだ？ 医学的には健康体だとさっき口にしたのも君じゃないか」

「『見なくても構わない』と言ったのです。何かを見落している可能性があります。大脳器質の損傷かも知れません。精神科よりも脳神経科に預けるのが先でしょう」

「これは決定事項だ」

「しかし院長！」

「…清水氏はこの一年、入院費用の他にも多額の寄付を当病院に寄越してきた。我々としては、氏の期待に沿えるよう最大限の努力をもって治療にあたらねばならん。心理療法は時間がかかる、早く始めるに越した事はない。要件は以上だ。下がってよろしい」

もはやこちらを見もしない院長に頭を下げ、若い医師は部屋を後にした。

強く握ったままの手を白衣のポケットに突っ込み廊下を歩き出す。

強欲ジジイめ、まだむしり取るつもりだ

あの娘は患者じゃなく金ズルか

彼は擦れ違った恵美子にも気が付かなかった。

◇

別館の外れまで来て、若い医師はその部屋へ入っていった。
精神科の診察室。目当ての人物はいつも通りそこにいた。

「何だよ～その辛気臭い顔は。まあ座れや」

ズイと診察用の椅子が目の前に押し出された。

「単刀直入に言う。お前わかっているのか？ 今この段階で彼女の主治医になるのがどういう意味か」
「ナニナニ～、もしかしてキミ、銭ゲバ院長の陰謀とかナンとか思っちゃったりしてるのお～？」

腰を下ろそうとした医師はギクリとし、目の前の友人の顔をまじまじと見た。

「まったくお前って奴は… そんな情報どっから仕込んでくるんだ？ 九十九」
「だぁ～て、そんなの見てればわかるじゃん」

クシャクシャの頭をボリボリと搔きながら、九十九医師は机の上の封筒を指差した。

「こんなのどお～するのよお～てカンジ？ 成果があったって言ってもさ、アレじゃん、俺らなんにもしてないのと同じじゃん」
「なぁ長官。前にもアドバイスを貰った事はあったが、今の彼女の状態、お前ならどう見る？」

それまでチャラチャラと軽薄に見えていた九十九が、カルテを手にした途端、別人に変貌した。
黒縁メガネの奥から鋭い眼光が溢れ出し、顔付きも厳しくなる。
納豆がいきなり一流フランス料理に変貌したかのようなようであった。

「この所見が正確だとして、自閉症ライクな状態から長時間のコーマ（昏睡状態）を経て到った現状は、統合失調症のクランケに見られる症状によく似ている」

検査結果の報告書をめくる手が忙しく左右に動く。

「統合失調症の原因が様々なのは君も知っての通りだ。多くは精神疾患だが、極く稀に肉体的欠陥に起因するものがある。君が危惧しているのはそのケースだろう」

バサリと書類を机に投げ出し、九十九は医師に向き直った。

「自閉症から統合失調症への移行、か。あり得ないケースだ」

「だがな長官」

「いい加減そのあだ名は止めてくれないか。五十六なんて名前、頼んでつけてもらった訳じゃない」

父親が旧日本帝国海軍のファンで、子供にまで司令長官の名前をつけたという話を学生時代、彼は九十九から散々聞か

されていた。

それで、ついたアダナが『長官』

「今から診察に行く。自分の目で確かめたい」

険しい表情のままで九十九が椅子から立ち上がった。